

「力加減が強かったら
おっしやつてくださいなね」
「大丈夫です。」
（今のところ怪しい動きは
無いわね…
こちらを油断させる
つもりかしら？
まあ人間相手なら何かあっても
すぐ対処は出来るけど…）

モジ

モジ

ピクッ

ピク

「こちら、心身を
リラックスさせるための
映像と音声になります
常連の方にご好評なんですよ」
「えっ？ は、はあ…」

（怪しいわね…）

証拠を掴むためにも

一応内容を確認するか…

…一見何の変哲もない

映像と音楽だけ…

確かに…何故かとても

心が落ち着いてくる…わね…



ゾクゾク

ゾクゾク

んっ

サッ

サッ

くち

ビク

くちゅ

じわあ

「…おや、こちらの方だいぶ凝ってますね〜悪いものが溜まっていますので重点的にほぐしていきますね」

「? はい…」

(えっ? 変なところ触られて、

これ明らかにおかし……)

…いえ、よく考えたら

別にこれくらい普通ね…

私どうしたのかしら…

…でも、普通のマッサージのはずなのに…

私…どうしてこんなに…)

ゾウゾウ

ゾウゾウ

ビクビク

ビクビク

ガクガク

ガクガク

ガクガク

ゾウゾウ

「あつひあつ！ ひああああ!!」
「わ、私、マッサージなのになんかイって...」
「老廃物が沢山出せましたね、
身体も温まってきた、
血行が良くなってきた
証拠ですよ」
「そ、そうか...これは老廃物を
出すためなんだから、
別におかしな事じゃない...」

キュン

キュン

「今回の施術はこれで
終了ですね〜
お疲れ様でした〜」
「…はい」
(結局今回は尻尾を
出さなかつたわね…
引き続き調査の
必要があるか…)

ピク
ピク

はっ

はっ

はっ

ピク
ピク

ピク
ピク

じゅわ
じゅわ



〜後日〜

（もうこれで5回目だけど…
来る度に「変わった機器」で
施術をされるくらいで、
相変わらずおかしいなところは無い…）
「お客様何度もありがとうございます。
当店ではご最頂いであるお客様限定の
特別コースをご用意しているのですが、
本日も利用なさいますか？」

（!!）…これだ!

何回も通った甲斐があったわ!

ついに尻尾を出したわね!

「特別コースでお願いします!」

もみ

もみ

「着替えました。」

「ククク、

特別コース用と言ったら

何の疑問も抱かず

エロ水着つけやがった。

感度の上がるオイルも

全身に塗り込んで…と。

ククツツ…遂にこのエロい体を

味わえると思うと

勃起が止まらんぜ。

…よし、準備完了だ。

これならもう催眠を解いても

問題ない。

さて、どんな反応するかな？」



パチン

「あれ… 私…

何か身体に違和感が…

……えっ!! な、なにこの格好!

いつの間に…!!

どうして? つ!!

ま、まさか

あなた私に何かしたわね!!」

「今更気づいてももう遅いぜ。

ここに来る度に

色々弄らせてもらったからな。

「どうだ? 身体が動かせないだろ?」



「このっ この程度で私を
どうにか出来ると思っただら…!」
「お、まだ少し動けるのか。
大したもんだ。だがこうすれば…!」
「ひぎっ!! 私、何でこんな簡単につ
ひあつ!! ふああああ!!」
「残念だがお前の弱いところは
もうぜんぶ知り尽くしてんだ。
さて、準備に時間を掛けた分、
ここからはたつぷりと
楽しませてもらうぜ♥」

くり
くり

くり

ドクン

くち

ガクン

くちゅ

くちゅ

はあ
はあ





「ごんなのっ... やめっ
あつ あああああああ!!」
「ハッハッハ！」
まずはマシンで強制連続絶頂だ！
ハツキングで感度が上がってるから
メモリが飛ぶほどキクだろ？
ぐちゃぐちゃにかき回して
トロトロの食べ頃にしねえとな!!」

ビク

ズキ

ズキ

ビク

ビク

ガキ



「おーし、いよいよお待ちかねの生ハメだぜ〜」
「まって！ そ、それだけは……！」
「もう身体はすっかり出来上がってるし、抵抗も出来ねえんだ。諦めて一緒に楽しもうぜ〜？ ハーッハッハ！！」

ピクン

はーっ

はーっ

はーっ

ピクン

ピクン

「あゝきもち〜!!
苦勞して調整した甲斐あるわ〜」
「なんつ… これっ
わたしのからだっ…おかしっ…!!
やめっ! うごかないで!」
「突かれる度に飛びそうたる?
俺と相性最高になるように
身体を弄つてあるからなよ」
「そん…な…あはん!」

はんっ

おっ

おっ

んっ

ズチ
ズチ
ズ

ズチ
ズチ

ズチ
ズチ





あ

あ

あ

ドクッ

ドクッ

ドクッ

ドクッ

ドクッ

「そろそろ出る……!!」

腔内なかでしつかり受け取れ!!」

「ちよつらいやつ! やめ……!!」

あつ くあつ ああああ!!」



はっ

んあ

はっ

ポクッ

ポクッ

ポクッ

「ヘア…ヘア…ヘア……」
「あっ……こんな好き放題、
この私の身体を玩具みたい……!!
……ん? 今なら身体が動く……!!
しめた! 隙をつくチャンス!」
「RoomのSecret!!!」



「おつとあぶねえ。

まったく、イツた後の僅かな隙に

反抗してくるとは、

流石恐ろしいやつだぜ。

だがこれで終いだ。

さあ、もう1度催眠に掛かって、

全てを忘れな。」

「このっ!! こんな卑怯...よ...

...あ...ああ」





「あれ…私、いつの間にか寝ちゃって…」

「お疲れだったのでしょう。」

「本日はこれで終了となります。」

「あ、次ご来店いただく際は」

「お友達とご一緒ですと」

「特別サービスいたしますよ。」

「友達…？ 怪しいわね。」

「もしかしたらこれで本性を」

「表すかもしれない…！」

「分かりました。考えてみます。」